新庄北高新聞

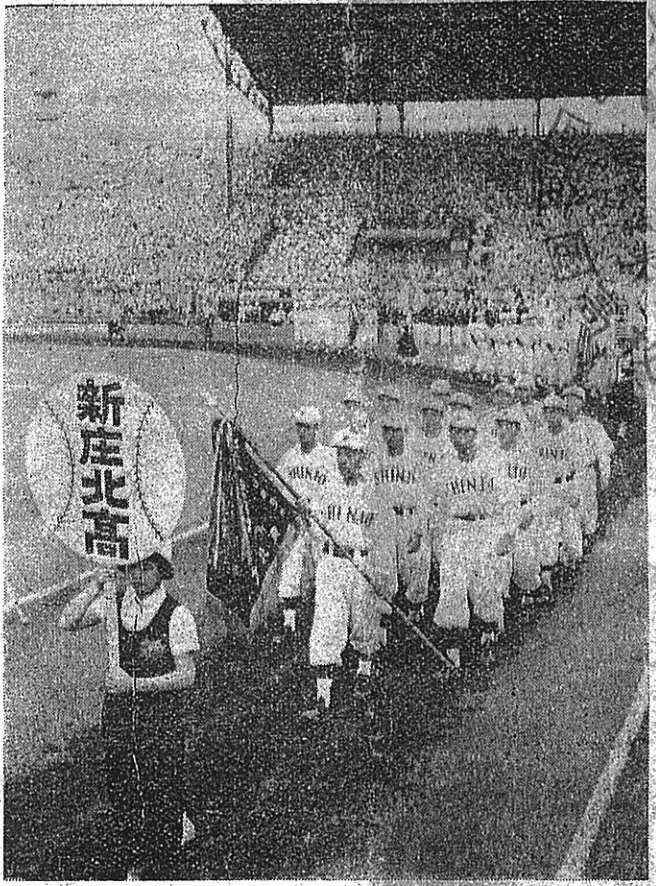
発行所
山形県新庄市小田島
山形県立
新庄北高等学校
新聞編集委員会
発行人 武田誠
印刷所
勝営堂印刷株式会社

甲子園の悲願なる!!

苦節四十年

今ぞ踏む甲子園

第三十七回全国高校野球選手権大会は、八月十日午前十時より艶やかな開会式に始まり、会期八日間のスタートを切つた。この大会に我校の野球部は、東北代表として出場し、信濃代表伊那北校と対戦したが、延長十一回ついに一対〇で惜敗した



若人の憧れのメッカ甲子園、誰しもが一度はぜひ自分の代表を送りたいと念願しているその桧舞台に、本校野球部は晴れの東北代表として出場し、多年の宿望を達成した。

例年冬の到来が早く、春の訪れの遅いこの雪国で、激しい練習を積んで来たのであるが、雄図空しく涙を呑んで来た。本年もＢクラス上位と目され、県予選前の評判は芳しくなかつた。果然東北大会に及んで、ナインの盛り上りこれに声援を送る応援団の団結は、いやが上にも高まり、福島県の春の覇者、双葉高を十二対一と一蹴、地元山形商を四対二で破り、県大会の雪辱をはかり、決勝では名門仙台一高の必死の食い下りを抑え六Ａ対五と退け、創立六十年に近く部史四十五年に垂んとする本校野球部の悲願遂に成つて、ここに栄光輝く甲子園出場権を得たのである。

この日、八月十日甲子園上空は夏雲むらがり、微風、気温は極めて高く、夏の大会気分は横溢していた。開会式前すでに、スタンドは八万の人波に埋めつくされ、色とりどりのパラソルの花咲き、夏空には七色のアドバルーンが林立し、とりわけライトスタンド上空の「ガンバレ新庄北高」のそれが一きわ高く観衆の眼についた。

かくて定刻十時、鳴りわたるファンファーレの合図にともなつてライト側通路から西宮女高生の持つ、日章旗と校名プラカードに先導され、晴れの廿三代表の入場式が開始された。昨年優勝の中京商業を先頭に、三百の球児が生涯の感激に、陽焼けした頰を高潮させ、涙と汗でぬれたであろうユニホームを、今日の一日は純白に洗い清め、一校一校力強く甲子園の土を踏み出す。期せずして起る万雷の大拍手。八万余人の興奮のどよめき。第卅七回全国高校野球部大会は此処にその頂点に達した。われらの新庄北高チームは、二〇番目に姿を現わす。緑のＳＨＩＮＪＯの文字もあざやかに。東北代表旗をしつかと握つた後藤主将を先頭に十四人の足並は、チームワークのそれの如く一糸も乱れず、遠く新庄まで響けよとばかり歩一歩行進する。

山形県のチベットと呼ばれる豪雪地帯の新庄より、栄えの代表として選ばれたナインはもとより、これを見守る三十名の応援団、京阪神の卒業生、ロート製薬関係者の眼には一様に、此の日の到来を待ちこがれた感激の涙にぬれていた。ああ、此の感激、終生忘れ得ぬ感動であり、母校の栄光久しかれと祈らずにはおられぬ一時であつた。

松村文部大臣の祝辞後、各主将による日章旗、大会旗の掲揚、荘厳にひびく君ケ代の吹奏。式たけなわの頃、乱舞する飛行機群の機から五色のテープに彩られた処女球が彗星の如く落され、かくて甲子園大会第一日の幕は切つて落された。

この日、第三試合、初出場同志の伊那北高との対戦は、殆ど同形互角のチームとあつて、異常な興味を呼んだ。果せるかな、双方終始善戦敢斗し、容易に得点出来ず熱斗実に十一回、勝利の女神は伊那高に幸し、遂に一対〇で敗退した。然し本校選手は母校と郷土の名誉にかけて敢斗し、新庄北高の名を全国にとどろかしたのであつた。

今後の努力を望む

学校長 永山信蔵

甲子園への出場

開校以来未曾有の偉業であり近来の快ニュースである。学校を挙げての驚異興奮、感激の瞬時であつた。幸運だけが事を此処まで運んだと思う人はよもや世間にはあるまい。勝利の陰に潜む幾多の美談に対しては感謝と敬服の外はないがこの点の詮索は暫く措いて今後の問題点を一つ採りあげて見たい。一言にして云えば選手を高校生以外の立場に置いては不可。高校生以下に見ることとは尚更不可であると云うことである。此点を堅持して始めて将来の精進を誓うことも出来、又今度の桧舞台を踏むことの出来た教訓を味わうことが出来るものと確信する。国内には球界の名門と呼ばれる学校が多数あるが長く名門の名を保ち、良き伝統と将来性を内蔵している学校が尠いのは私達が学校教育上数多くの示唆を与えられている所である。今回野球部の示した実力の発揮が凡て方面の実力の向上と、何事も「成せば成る」の意気込が今後の校内外に普ねく及ぶ事とを衷心から祈念する次第である。

決算審議会おこなわる

今回の甲子園大会出場にあたつては、各方面から好意ある寄附を頂き、関係者一同心から感激しているが、各係の会計整理もすみ、九月六日午後一時より本校において、新庄市長（代理総務課長）、市会議長、市地区協議会長、野球部後援会長（代理副会長）、北高校長、同同窓会長、ＰＴＡ会長、定時制ＰＴＡ会長、同夜間部後援会長（理副会長）が出席、慎重な審議の上斎藤喜太郎、石川弥五郎両氏の監査が済み、下欄の決算報告書の如く決定された。尚残額については野球部発展の為に有効適切に使用するようにと学校長が一任された。

新聞補助費は当初発行予定部数より、更に二千部の増刷、配布にきまつたので、学校長が一万円の増額を認め下欄のようになつた。

【係より】

いろいろの事情がありましたが、決算報告が遅れましたことを深くおわび申し上げますとともに、今後も宜しく御願い致します。

お祝いの言葉

新庄市長 木田清

北高が東北大会に優勝して晴の甲子園に出場し堂々戦つたことは、真に愉快なことだ。市民もどれ程喜んだことは近来にないことだ。新庄という名も、これで天下にとどろいた。北高球史始まつて以来、始めての偉業をたてた選手諸君を心から祝福したい。又ここまでくる為に尽力された学校当局、先輩の諸士及び後援会の方々に対しても深く敬意を捧げたい。歴史は一朝にしては出来ない。この偉業をとげられた土台も大きな役割を果したことと思う。又現役諸君の「ねばりぬいて勝つた」この事実も、後輩諸君に大きな影響を与えるだろう。市民も兎角、この頃じめじめした気持で居るところへ白球を青空にカーンとかつ飛ばすような、すがすがしい気持を与えてくれた事は大変嬉しい。この頃新聞に「球都新庄」など書いているが、それ程一般市民も非常に関心を寄せている。諸君の活躍の背後にはいつも市民や郡民が大きな関心をよせていることを忘れないで、今後益々精進されるよう念願する。

「論説」

今回の野球部の壮挙ほど、我々の愛校心、母校意識の高まつたことはかつてなかつたであろう。もちろん、今日に至るまでの部関係者の苦労は筆舌につくしがたいものだつたと想像される。県大会、東北大会、甲子園大会と全力をあげて敢斗した選手一同に対して心からその労をねぎらいたい。

甲子園出場のかげには、全員の声援もさることながら、部先輩や後援会の並々ならぬ指導後援、ＰＴＡ、同窓会、市民の絶大なる支援の[illegible]があつたことを思い、深く感謝の念を捧げねばならない。たゆまぬ精進と、これらの団結の力が、苦節四十五年豪雪地帯の新庄から、甲子園原頭に駒をすすめしめたのである。

自覚と自信を持とう

プレイをする者の高校生らしい試合ぶりは、昨年の東北六県大会後の賞讃の投書でも想像されるが、今大会においても、対戦チームの一応援団生徒から同様趣旨の投書が舞い込んでいる。あらゆる競技について云えることであるが、これは非常に重要なことである。勝敗にのみこだわつて、学生スポーツの本道を逸脱してはならない。学生スポーツは技術の向上のみをはかつて、事成れりとするならば邪道も甚しいものであり、あくまでも学校体育の目的に向つて進むべきである。常に高校生としての自覚より出発した品性と教養が、あらゆるものに先行されねばならない。であるから、我々もこの点をわきまえて声援すべきで、決して単なるショーマンとして、選手を見たり扱つたりしてはならない。今後もかかるフェアなプレイと声援をなすべきである。

今夏は又、卓球部が札幌におけるインターハイで、言語に絶する悪条件を克服して、全国のベスト八にまで進出し、数少ない女生徒の為にも万丈の気を吐いた。まずは慶賀すべき運動成績であつた。運動選手には、学業の問題はじめ幾多の困難がつきまとう。もちろん本校でも、完全に両立している選手が多くあるが、要は全生徒がよりよく努力することが、最も重要な課題ではあるまいか。

一時進学率が低下し、褪色に沈んだ時期もあるが、今春あたりから漸次好転して来た兆が見える。以上のようなことが、次々と成されている今日、我々は「やれば出来る」という強い自信と誇をもつて進むべきである。世上運動成績のあがつている時は、進学就職率も好調であると云われている。創立六十周年も間近い。幸い[illegible]しむ時が訪れた。今回の昇華された母校意識を盛りたて、確たる自信を秘め、更に向上すべくたゆまぬ精進を続けよう。たとえ万難があろうとも。